

【論文】

話し言葉における否定表現について 英語教育と英語学の新たな接点を求めて

廣瀬 浩三

0. はじめに

日本の英語教育において、発信型の英語が重要視されるようになって久しい。英語教授法においても、コミュニカティブ・アプローチ [cf. Wilkins(1976), Littlewood(1981)など] やその後続くナチュラル・アプローチ [cf. Krashen, S.D. & T.D. Terrell(1983)など] が主流となって、いわゆる「使える英語」の習得を目指すようになってきている。

他方、文法記述に関しては、依然として伝統文法の流れを汲む「学校文法」が君臨し、その記述は書き言葉中心であり、話し言葉の特徴、特に、くだけた口語に関しては、言及されることはあっても、あくまでも例外的なものとして扱われ、その実態についてはまだ知られていない面が数多くある。

また、上記の「学校文法」、並びに 1960 年以降の新しい英語学においても、様々なアプローチはあるにせよ、文法記述の中心は文レベルに置かれ、コミュニケーションの場における機能的な観点からの記述については十分ではない。

このように、英語教育の目標とすることと、その英語教育の基盤となる文法記述との間には依然として距離があり、そのギャップを埋めるべく新たな「英語を使うための文法」、あるいは、「コミュニケーションのための文法」が求められる。¹⁾このような文法には、話し手・聞き手及び言語使用の文脈や状況を念頭に置き、それぞれの言語表現が果たす談話機能を中心に据えた文法的記述が必要となろう。

本稿では、ささやかな試みとして、コミュニケーションにとっては極めて基本的な事項の一つである否定表現を取り上げながら、従来の書き言葉中心の文法から、実際に使われている話し言葉の文法への転換を図っていくために、“naturally occurring data” (自然に生じる言語データ)を重視する立場をとり、現代英語の生きた姿を眺めていきたい。

以下、no や not を用いた会話特有の表現や特殊構文など、くだけた話し言葉で用いられる否定表現の織りなしを中心に分析し、談話文法的な視点からその機能を考察すると共に、話し言葉の持つダイナミックな表現性・創造性についても探っていきたい。

1. no の談話機能について

まず、否定表現の基本語である no の働きについて見てみよう。no の働きを端的に集約

すると、「応答語として否定を表す」ということになる。しかしながら、no の働きをこのように集約した場合、注意すべきことは、「応答語として」機能するということから、no には、何らかの先行する談話的要素が必要となるということである。また、「否定を表す」と言っても、何に対する否定を表すのかを明らかにしなければ、no の働きを十分理解したことにはならない。このように、no の機能を考える場合には、その本来の性質から文レベルを超えた談話文法的考察が必要となる。以下、廣瀬(1999)で想定した4つの発話の志向性(orientation)を基に、no の談話機能を再考したい。

ある言語表現が談話的にいかに貢献するかという観点から捉え直すと、まず第1に、「発話内容への志向性」(Orientation toward utterance contents)が認められる。すなわち、ある言語表現は、主たるメッセージの一部を構成し、メッセージの一要素としての役割を果たす。これは、言語が果たす中心的な機能で、言語の指示的機能(referential function)あるいは概念的意味(conceptual meaning)を形成する機能として理解されてきたものである。しかしながら、場合によっては、ある言語表現はメッセージの内容そのものに関わるというよりは、そのメッセージ全体の談話的特徴付けを合図し、先行発話との論理的つながりを主として示すこともある。さらに、発話全体として遂行される発話行為(Speech Acts)と関連を持つことがあり、その発話条件との絡みで機能する場合もある。このように、ある言語表現の発話内容との関わり一つ取っても、談話文法的には、様々な意味機能が認められる。

第2に、もっぱら「話者態度への志向性」(Orientation toward speaker's attitude)を担う言語表現があり、これから述べようとする(あるいは現在述べている)発話に対する話し手の態度が表されることがある。ある種の情報(新情報 / 既知情報)を受容し、それに対する感情的反応を表したり、後続する内容に対する話し手の様々な判断が合図される。

さらに、第3の志向性として、幅広く談話構造と関わり、「談話構造への志向性」(Orientation toward discourse structure)が見いだせる。談話全体の切り出しから締めくくりに至るまでの各段階で、談話構成と関わって各言語表現が重要な機能を果たすのである。まず、発話の生産と関わって、「切り出し」、「途中の言いよどみ」、「修正」、「進展」、「締めくくり」の各段階で言語表現が機能する。特に、会話の「順番交代」(turn-taking)との関わりで果たす機能も見いだせ、会話の駆け引きの中で、順番要求、順番譲渡、順番保持などを担う言語表現がある。この他、「話題セクション」(topic section)との関わりで、「話題の開始」、「話題の継続」、「話題の変更」、「話題の終了」を合図することもある。

最後に、各言語表現の重要な働きとして、相手との対人関係の調整に関わる機能がある。この「対人関係への志向性」(Orientation toward interpersonal relationship)は、他の3つの志向性と並行的に生じる志向性で、特に第2の「話者態度への志向性」との関わりが深い。この意味において、「対人関係への志向性」は、他の志向性のとは異なるレベルの上

位概念として規定しておくべきであると考えられるが、そのような志向性を担った言語表現は、話し手の控えめな言動や相手に対する丁寧さ (politeness) を表すと共に、その裏腹にある話し手の自己防衛的な姿勢を表すこともある。

以上示したような談話的志向性を踏まえると、no の最も一般的な用法である(1)や(2)の例は、「発話内容への志向性」と関係し、相手の命題内容の真偽を尋ねる疑問文や断定文に対して応答し、その否定を表していると説明できる。

- (1) “Are you still working at the clinic?” “No, I work at the hospital now.”
MED(「まだ診療所で働いているのですか?」「いえ、今は病院で働いています。」)
- (2) “You’re always blaming me whenever something goes wrong.” “No, I’m not.”
Ibid.(「君は何かうまくいかないことがあるといつも僕を責めてばかりいるね。」「いえ、そんなことはありませんよ。」)

さらに、次の(3)では、発話行為と関わって、先行する発話行為表現に対する応答を示し、その発話行為を否定することになる。具体的には、offer という発話行為に対して拒否を表していることになる。

- (3) “Do you want some more coffee?” “No, thanks.” LASD(「もうすこしコーヒーをどうですか?」「いいえ、結構です。」)

また、no には、以下のように、相手の発話に対して、驚きや当惑、失望などの感情を表すマーカーとしての機能があり、「話者態度への志向性」を反映する形で、話し手が未知の情報に接した際の感情的反応を示す。

- (4) a. “I’m leaving.” “No!” OALD⁶ (「もう帰ります。」「まさか(うそでしょ。)」)
b. “She’s had an accident.” “Oh, no!” Ibid.(「彼女が事故にあったそうだよ。」「まあ、大変。」)

特に注意を喚起したい no 用法は、上記のような一般的な no の用法に加えて、第3の志向性、すなわち談話構造と関わる極めて会話的な用法が存在するということである。次の(5)における no は、「談話修正(repair)を合図する no」と位置づけることができ、no によって談話調整を行っている。²⁾

- (5) “He said, ‘If you don’t...’ No...No...he said, ‘I will, I really will... Yeah. That’s what it was. ...” R. B. Parker, *The Godwulf Manuscript* (「彼が言った

のは『もし君がいやなら...』そうじゃない。違うわ。彼が口にしたのは『私はそうするつもりだ。本当にやってやる。』ええ、確かそうだったわ。』)

こうした no の働きは、次の(6)及び(7)において、後続する要素でさらに明示的になっている。(6)では、後続する発話で先行発話を別の言い方に変更することが述べられ、(7)では、前言を撤回することが述べられている。

- (6) "Do you want to—no, let me put it this way—do you need me to come? K. Stewart, *If I Ever See You Again* (「君が望んでいるは、いや、こう尋ねさせてくれ。君は僕が来ることを必要としているのかい?」)
- (7) "Do you remember when you saw her last?" "Not really. Sometime before she went off. Christmas, I guess. No, I take that back. I did see her New Year's Eve." S.Grafton, *"B" Is For Burglar* (「彼女と最後に会ったのはいつか覚えている?」「あまりはっきり覚えていないわ。彼女が出ていった前だったから、クリスマスの頃ね、たぶん。いえ、取り消すわ。確か大晦日に彼女に会ったわ。」)

次の(8)における no も、先行文の発話行為そのものに関わる応答を表すというよりは、発話の順番交代に関わって、相手が発話の順番を譲渡 (turn-yielding) しようとしているのを拒み、再び相手が会話の主導権を握って進めていくことを促しているとして解釈できる。

- (8) "I don't know yet. I'm hoping to find out. What else can you tell me?" "No, no. You ask me and I'll answer. I can't think of anything off the top of my head." S. Grafton, *"K" Is For Killer* (「まだ知らないわ。知りたいと思っているところよ。何か他に教えてもらえる?」「いえ、いえ、こうしましょう。あなたが私に質問して私が答えて行くわ。頭に何も浮かばないもの。」)

次のように、no が上昇調の抑揚を伴い、独立的に用いられる場合においても、相手に発話の順番を継続させ、さらなる発話を促す機能を果たしている。先行する否定文に反応し、その否定を引き取る形で内容を確認しつつ、さらに詳しい説明を求めているのである。

- (9) "But that is not the strange part." "No?" "The strange part is he listened to it." J. Deaver, *The Bone Collector* (「しかしそれは奇妙な部分ではない。」「そうかい?」「奇妙な所は彼がその話に耳を傾けたということだよ。」)

以上、様々な談話的志向性を勘案しながら、no の談話機能を再考してきたが、談話文

法的な観点から眺めることにより, no の持つコミュニケーションにおける働きがより一層明瞭になり, (5)~(7)に見られるような会話特有の用法についても妥当な位置づけができ, 話し手と聞き手の相互作用の中で, 自らの発話を導くのに no が巧みに用いられていることが明らかとなった。

このように, 話し言葉については, それ独自の視点から見直すことによって, 従来の文法記述を見直すことができ, その意味機能についての新たな発見が期待できる。

以下, くだけた話し言葉でよく用いられるある種の否定表現を取り上げ, 話し言葉の持つダイナミックな表現性, あるいはその創造性について見ていきたい。

2. Not that...構文について

まず, 次のやり取りを考えてみよう。

- (10) “Is Barnes looking at other suspects?” “*Not that I know of.* But then, like I said, I’m not in the loop.” J. Evanovich, *Hot Six*(「バーンは他の容疑者を調べているのかい」「知っている限りそのようなことはないと思うよ。でも, 言ったように, 僕は部外者の立場にあるのでね。」)

斜体字で示した “*Not that I know of.*” という表現は, くだけた話し言葉でよく用いられ, 先行する yes-no 疑問文に対する応答を表す慣用句として, 「私の知る限りはそうではない」という意で用いられる。この表現を慣用句として処理してしまうとそれ以上分析する余地はないが, その慣用句がどのように派生してきたか, あるいはこの表現の発展性には興味深い面がある。先行研究である吉田(1987)及び松田(1996)を踏まえ, この表現の統語的特徴, 並びに談話的機能を考察していきたい。

(10)における “*Not that I know of.*” は, その内容を機械的に復元すると, “Barnes is *not* looking at (any) other suspects *that I know of.*” となり, not は, Barnes is *not* looking for (any) other suspects. を代示する not, すなわち文代用語として機能する not であると見なすことができ, その後に関係代名詞の that が続き, I know of が後続している表現であると構造分析できる。さらに, know の後に of がきていることから, 本来的には, その目的語としてある具体的な物事, あるいは人の存在を想定する表現となっており, それが先行詞として, 先行文に内包されていることが示唆される。実際の慣用句としては, 先行文の意味内容を not 一語に覆いかぶせ, 表面的には個別の物事や人物は現れてこない。命題内容全体を否定の射程にし, 口語にふさわしい無駄を省いた簡潔な表現として機能している。

また, この表現を意味機能的に分析すると, 前半部は, 先行する疑問文に対する真偽値として否定を表していると解され, that 以下で, その否定に制限を加える要素が添えられ

ていると言える。言い換えると、この表現は、問われた命題内容に対して、否定命題を提示すると共に、その判断根拠が示された表現となっているのである。文脈によっては、すべての事実を知っているわけではなく、現時点で個人の持っている知識のみを拠り所として否定を表していることから、控えめに穏やかな口調で、話し手の遠慮がちな態度を表し、場合によっては、自信のなさや自己防衛的な態度も読み取れる。本稿で先に示した談話における志向性から言うと、「発話内容に対する志向性」及び「発話態度への志向性」を兼ね備えた表現となっているのである。

そして、“Not that I know of.”という表現は、それ自体定型表現といってよいが、くだけた話し言葉では、同様の機能を果たす別の表現も見出せる。³⁾

(11) a. “Is she into drugs or alcohol?” “*Not as far as I know.*” S. Grafton, “K” *Is For Killer* (「彼女は麻薬かアルコールに溺れているのかい?」「知る限りそんなことないわ。」)

b. “Living there with some woman, was he?” “*Not to my knowledge.*” “Woman named Holly something. With an S.” “*Not to my knowledge.*” Ed McBain, *The Last Best Hope* (「そこである女性と一緒に住んでいたんじゃないのかい、彼は?」「知る限りそんなことないと思います。」「ホリー何とかという女性だ。苗字は確かSで始まったんじゃないかな。」「私には分かりません。」)

また、以下のように、know ofの代わりに、同義のbe aware ofが用いられた例も見受けられる。

(12) “I take it he wasn’t in the middle of a hassle with anyone?” “*Not that I am aware of.*” S. Grafton, ‘C’ *Is For Corpse* (「彼は誰かともめているなんてことはなかったように思うのだが。」「知る限りそのようなことはありません。」)

さらに、“Not that I know of.”という表現と関連して、口語英語のダイナミックな一側面を観察しておこう。くだけた話し言葉では、いわゆる会話特有のレキシカルフレイズをちりばめながら、テンポよく会話が進められていくが、一つの表現が定着すると、それに基づいて、様々な派生形を生み出し、言語表現自体に新奇さが求められていく。

次の(13)では、ofの代わりにaboutが用いられており、(14)では、knowが単独で現れている。(14)の表現は、ofが省略されたものであると言えるが、“Not that I know of.”と(11)で示した“Not as far as I know.”との混交(blending)によって生じたとも考えられ、thatには関係代名詞の意識は薄れ、as far asの意を担う接続詞としての機能が読み込まれることになる。

- (13) "He ever come in?" "No ,Lieutenant ,he never did. *Not that I know about.*"
W. Harrington , *Columbo : The Game Show Killer* (「彼は(そのバーに)入ったことがあるのかい?」「いいえ , 警部 , 決してそんなことはありません。私の知る限りは。」)
- (14) "Is something wrong?" "*Not that I know , dear.*" S. Grafton , "*O*" *Is For Outlaw* (「どうかしたのかい?」「なんともないよ , 知る限りはね。」)

さらなる発展形として , that 以下にくる動詞についても , know 以外に , 他の認識動詞や知覚動詞 , さらに伝達動詞へと広がりを見せている。これらの表現については , 直接 know of が他の他動詞に置き換えられたと言うよりは , (11)あるいは(13)の表現を介して , 慣用句に自由度が与えられて生じたものと言えるかもしれない。意味機能的には , 共通して that 以下で否定の判断根拠が示されることになり , 現在持っている知識から判断する以外に , 知覚的あるいは伝聞的情報から判断根拠を示す場合があり , それを明示する動詞がこの表現形式に現れてくるのである。

- (15) "Did Pat Usher ever mention him?" "*Not that I recall.*" *Ibid.* (「パット・アッシャーは彼のことを言いましたか?」「そのようなことは記憶にはありません。」)
- (16) "Anybody else go near that car while you're working on it?" "*Not that I saw.*"
Ed McBain, *Nocturne* (「おまえが見張っていたときに誰かあの車に近づいた者がいたかい?」「いえ誰も目に入りませんでした。」)
- (17) "Did she leave a will?" "*Not that I heard.*" S. Grafton, "*B*" *Is For Burglar* (「彼女は遺書を残したのですか?」「そんなことは聞いていません。」)
- (18) "Is there any possibility she might have heard from Sheila in those few months?" He shook his head. "*Not that she ever told me.*" S. Grafton, "*G*" *Is For Gumshoe* (「彼女はひょっとしたらあの2 , 3ヶ月の間にシーラから便りをもたらした可能性はありますか?」「彼女はそんなこと言っていませんでしたよ。」)

さらに詳しくこの構文の機能を考えると , not を主題(theme)の位置に置き , ある命題に対する話し手の心的態度は not が文頭にくることにより中立化されていると言え , 基本的に , その命題の否定についての判断を客観的に述べる言い方となり , 現在持っている知識(記憶) , 知覚から得られた情報 , 伝聞として得られた情報を拠り所としていることを主張しているのである。結果として , すべての事実に基づく確固たる信念を主張しているのではなく , 命題の真偽性については一歩引いた発話態度が表され , 非関与的な態度や自らの責任回避使用とする発話態度が暗示される。別の言い方をすれば , 命題内容についての

真偽については、最終的に相手あるいは第3者の示す別の根拠によって、覆る可能性を認めた表現形式となっているのである。⁴⁾

このように、当初は、“Not that I know of.”という固定した表現であったが、実際の文脈の中で多用されていく中で、他の意味的に類似した表現やそれ全体が文脈上表す意味内容と関わって、弾力のある表現として機能していることが窺える。談話における意味機能が慣用表現の凍結性(idiomacity)をのみこんで、新たな進化を遂げている姿を観察できる。

なお、吉田(1987:251-252)では、次の例のように、notの部分に変化し、none、nothingが現れている例も指摘している。

(19) "And yet ,there were no other men?" "No. *None that I know of.* Adultry was never an issue. We couldn't have got a divorce in this state if we'd wanted to."

Ed Mcbain , *Killer's Choice* (「でもほかに男はいなかったのですか」「はい、私の知る限りではほかには男はいませんでした。浮気はこの州では問題になったことはありません。離婚したくてもできないんですよ。)」)

(20) "Suite Four-Thirty , Hank. Got anything on it?" "*Nothing I know about ,*" Hank's face was worried , his eyes alert. B. Halliday , *Pay-Off in Blood*

(「403号だ、ハンク。何かつかんだか」「いや、おれの知っている範囲では何も出てこない」ハンクの顔は心配げで、目の油断がなかった。)

本稿で取り上げた“Not that I know of.”という慣用句と並行的に、否定表現としては同一の形式を取る次の否定表現について考えてみよう。

(21) We forgot to leave our number - *not that it matters*; they can always ask MED (電話番号を残してくるのを忘れました。でもたいしたことじゃないけれどもね。だっていつでも彼らは尋ねることができますから。)

(22) “He (=The dog) doesn't actually *eat* the furniture. I mean, chewing isn't really eating. And *not that he even chews.*” J. Evanovich, *Hot Six* (「その犬は家具を食べちゃいけないよ。つまり、噛むということは本当に食べることは違うんだ。しかも実際噛むことさえしないけれどもね。)」)

まず、この否定表現の特徴を簡単にまとめておくと、not以下を追加陳述的する形で、先行発話に制限を加えている。この場合、notは、that以下を否定しており、notの働きは、“Not that I know of.”の場合とはまったく異なっている。また、thatについても、関係代名詞ではなく、接続詞のthatであると分析でき、that以下にくる要素に形式的な制限はない。ただし、意味的には、“Not that I know of.”と通じる面があり、相手の批

判を避けたり，自らの主張の妥当性を保持するために，言い訳めいた制限的な内容がくることが多い。⁵⁾

この表現の発展形として，本来は，(21)や(22)に見られるように，ダッシュで暗示されるように一呼吸置いて先行発話に添えられ，文尾にくるのが普通であるが，次のコンマでつながれた(23)に垣間見られるように，次第に先行発話との結びつきが緊密となっていき，全体として一つの発話を形成するものとして発話内に組み込まれていく。

- (23) She wouldn't tell me how much it cost , *not that I was really interested.* - CIED (彼女はそれがいくらしか決して言おうとしなかったんだ，たいして興味はなかったけれどもね。)

そして，次の(24)以下の例に見られるように，文頭に現れるようになり，but と相関的に用いられる用法へと発展していく。

- (24) "How'm I doin' so far?" "Not bad." "Well , there you go," he said. "*Not that it matters , but how'd you track me down?*" S. Grafton , *O Is For Outlaw*
(「僕のこれまでの仕事ぶりはどうだい?」「悪くないわね。」「ほら，言った通りだろ。」と彼は言った。「たいしたことじゃないのだけれども，どうやって私の跡をつけてきたの?」)

- (25) "Do I get the job ?" "No can do, Edna. *Not that I wouldn't want to help you out, but being a bounty hunter takes a lot of special skills.*" J. Evanovich, *Hot Six*
(「仕事がもらえるかしら?」「無理な話だわ，エドナ。あなたを助けたくないわけじゃないけれど，賞金稼ぎになるためには特別な技術が必要なのよ。)」[No can do. という会話表現についても注意。]

- (26) Morrie Bloom was telling them a few things about the previous murder.
"*Not that I'm yet saying that they're linked,*" he said. Ed McBain, *The Last Best Hope* (モリー・ブルームは彼らに過去の殺人についていくつか気づいたことを語っていた。「それらが関連していると言う訳じゃないが」と彼は話を切り出した。)

(24)や(25)のように，文頭に現れてくる Not that 構文は，話し手の後続する発話行為そのものとの関わり合いが強くなり，話し手は，これから行おうとしている言動が重要ではない，あるいは本意ではないと自ら認め，相手から予想される批判に対して予防線を張るのである。このように，but に先行する部分は「相手の批判の先取り表現」として機能し，望ましくない事態を予め回避しようとする話し手の防衛的な態度が現れた表現となる。話し手が後続する発話には限定的な関与しかしていないことを合図し，発話内容の妥当性が

確固たるものでないことが示される。一方、聞き手としては、but に先行する文の内容から、ワンクッション置かれることで、心の準備をする余裕が与えられることになる。また、(26)の切り出しにも窺えるように、not 以下の部分で、自らを談話的対人関係において一段格下げして、相手に対して控え目で丁寧な態度で接すると同時に、その裏腹で、自己主張を展開していく用意周到な表現であるとも言える。このように、文頭にくる Not that 構文は、聞き手との駆け引きが際だつ、「対人関係への志向性」が強い表現として機能する。⁶⁾

以上、“Not that I know of.”の慣用句及び Not that 構文を中心に、その談話機能を明らかにすると共に、それぞれ否定を表す表現形式として、その発展性について言及した。このような表現としての発展性は、他の話し言葉で好んで用いられる表現についてもよく見られる現象であり、「話し言葉の弾性」と呼んでおきたい。このような言語現象をいかに捉え、記述していくかが、話し言葉の文法の大きな課題の一つであるように思われる。

3. くだけた話し言葉における否定の強調表現について

前節では、主張を制限するある種の否定表現を取り上げ、話し言葉の中で果たす働きを見てきたが、この節では、否定を強調し、全体として主張を強めるために用いられる否定表現について考えていきたい。

否定を強調する端的な表現形式は、以下の例に見られるように、否定表現を繰り返すことである。

- (27) Bob: Here, have some sweet potatoes. Bill: *No, thanks.* Bob: Oh, Come on!
Bill: *No, no, a thousand times no!* Spears(1992) (ボブ: さあ、スイートポテトをどうぞ。ビル: いいえ、結構です。ボブ: 遠慮しないで、さあ。ビル: いいえ、いえ、絶対いりません。)
- (28) “You going after Ranger?” “*Nope. Not me. No siree. No way.*” J. Evanovich, *Hot Six* (「お前はレンジャーをつけていたのかい?」「いいえ。私はそんなことはしていませんよ。どんでもない。絶対そんなことはありません。」)
- (29) “I think I’d just better give you the taxi-fare and be done with it.” “*No, no, no.*” he cried. “*It’s out of the question! I wouldn’t never dream of It! Not in a million years! I would never accept money from you like that.*” D. Dahl, *The Umbrella Man* (「私があなたにタクシー代をあげてそれで終わりにしましょう。」「いえ、いえ。それは問題外ですよ。そんなこと夢にも思ってはいません。とんでもありません。あなたからそんな風にしてお金を受け取れませんよ。」)

上の例のように否定表現を繰り返す以外に、一文の中で、次のように、否定表現と呼応し

て、他の副詞を添えることで否定の意味を強調することができる。

- (30) a. I *don't* like him *at all*. G. De Devitis, et al.(1989) (彼のことはまったく好きではない。)
b. They did *no* work *whatsoever*. *Ibid.* (彼らは何の役にも立たなかった。)
c. It's got *nothing whatever* to do with you. *Ibid.* (それは君とはまったく無関係な事柄だ。)

以下、こうした否定を強める副詞の中で、くだけた話し言葉特有の言い回しとして用いられる *ever* の用法に注目して、口語的な否定表現の持ち味を探っていきたい。⁷⁾

3. 1. *ever* に込められる思い

口語英語において特有の否定表現の一つとして、(31)のように *ever* が tag expression の形式を取って、文尾に用いられることがある。また、この *ever* は、書記法としては、コンマが置かれる場合以外に、(32)のようにダッシュを介して用いられることもあるが、*ever* 一語で独立的に用いられることも多い。(31)~(33)では、いずれも *ever* 一語によって、前言で述べられている内容が将来に渡っても決して生じないことが強調されている。

- (31) “You will never call my wife ,or me ,*ever*. Do you understand?” P. Margolin , *Gone , But Not Forgotten* (「今後私の妻と私に決して電話するんじゃないぞ、絶対に。分かったか?」)
(32) “I'm *not* (原文イタ) getting remarried —*ever* !” N. Klein , *Angel Face* (「私は再婚なんかするつもりはありません。絶対に。」)
(33) “I will never talk to him. *Ever* , ” I said with perfect calm. E. Segal , *Love Story* (「二度と父さんとは話をしないよ。絶対にね。」と僕はまったく冷静に言った。)

(31)や(32)の例に見られるように、この *ever* は、感情的な表現となり、強い語気で発話されることになるが、逆に、(33)では、あえて冷ややかに言い切ることでさらに強い決心を表しているように思われる。

このように、文尾の一語で相手に有無を言わせぬように打ち切ってしまう言い回しは、別途、会話にしばしば用いられる *period* の用法と相通じるところがある。自らの主張を「それだけのことである、それ以上何もない」と言い切って、相手に反論の余地を与えないのである。この *period* の場合についても発話にどう組み込まれるかについては段階性が見ら

れ、(34)のように、コンマの後に添えられる場合と、一呼吸置いて、独立的に用いられる(35)のような場合がある。

(34) “He’s just a little dog but a lot of people won’t break into a place if there’s a dog, no matter size he is. They’re just scared of dogs, *period.*” L. Block, *A Walk Among the Tombstones* (「それはただの子犬なんだが、もし犬がいれば多くの者が盗みには入らないんだ、その犬がどんな大きさをだろうがね。犬が怖い、ただそれだけのことさ。」)

(35) “Don’t start overworking that imagination of yours, Tony. Charlotte Dreyfus is a friend. *Period.*” F. M. Stewart, *Six Weeks* (「そんなに想像をたくましくするんじゃないよ、トニー。シャーロット・ドレイファスさんは、友人さ。それ以上の何者でもないよ。」)

なお、次の例では、「念押し」の機能を持つ *ever* が会話のやり取りの中で用いられ、相手の言葉を引き継ぐ形で、「否定の確認」が行われていることに注意されたい。

(36) “I don’t think about those times ,” Susan said. “*Ever?*” “I treat it as something that never happened.” R. Parker, *Hugger Mugger* (「当時のことは考えないことにしているの。」とスーザンが言った。「絶対に?」「まったくなかったこととして考えているもの。」)

以上、述べてきた否定表現では、*ever* 一語を文尾、あるいは独立的に添えることで、前述の内容が反響し、聞き手は、話し手の揺ぎない強い主張を感じ取ることになる。話し手の立場からすると、*ever* 一語に、すべての思いを凝縮させた表現となっており、表現効果の高いものとなっている。このように、英語の情報構造が持つ文末重点(end-weight)あるいは文末焦点(end-focus)の原理と自然と結びつく形で、否定の強調が行われている。⁸⁾

ちなみに、特にアメリカ口語において若者が用いる *not* が文尾にくる表現形式も同工異曲のものとして理解できる。ただし、この場合、先行文にはもっともらしいあるいは好ましいと考えられる肯定的な内容がきて、文の最後でそれを覆してしまう表現形式となるのである。次の(37)では‘snappy’、そして(38)では‘fabulous’という語に話し手のプラス評価が現れているが、それが最後で否定され、最後の例の(39)では、一般的には面倒なこととして考えられることを、一端大好きと言っておいて、主張を覆してしまうのである。聞き手としては、最後に梯子をはずされた形になるが、話し手側からすると、皮肉的な言動を自ら解き明かす形になる。ひねりが効いたパンチのある表現形式として機能し、しばしばおどけた言い方となり、あざけりが込められることも多い。

- (37) He is a snappy dresser...*not*! Haiman(1998) (彼はしゃれた着こなしをしている　なんてことはないよ。)
- (38) That's a fabulous science fair project...*not*! *Ibid.* (それはすばらしいサイエンスフェアですね　なんてうそですよ。)
- (39) I really like spending my Saturday afternoons tidying the house —*not*!
*LDCE*³ (家の片づけをして土曜日の午後を過ごすのが大好き。なーんちゃって、絶対ありえないよ。)

3.2. never, ever の響き

ever が, never と共起し, 'never, ever' と連続的に畳みかけることによって否定が強調される表現が, くだけた口語に多く用いられるようになってきている。⁶⁾ (40a)のように未来表現と共に用いたり, (40b)のように完了形の後に続くこともあり, 過去の出来事に言及する場合にも用いられる。

- (40) a. I'll *never ever* forgive him for leaving me. —*LDCE*³ (私のもとを去るなんて彼のことを金輪際決して許さない。)
- b. I've *never ever* heard Nina swear. —*LAAD* (これまでニーナが悪態をつくのを耳にしたことはまったくない。)

また, 以下の例のように, 命令文と共起することも多く, 次の例では, 先行文でも, 'never...again' と否定が強調され, その後でさらに 'never, ever' と畳みかけることによって, 厳しい言い回しとなっている。⁹⁾

- (41) “*Never touch me again*, Kevin. And *never, ever* threaten me.”—P. Margolin
The Burning Man (「私に二度と触れるな, ケビン。そして, 絶対に私を脅すようなまねをするんじゃないぞ。」)

次の(42)では, 映画俳優のトム・クルーズが映画の主演とギャラとの関係についての質問に答えている場面であるが, お金のために映画に出たことがないことを, 否定の強調表現を巧みに用いてきっぱりと言い切っていることを観察されたい。否定表現が *never don't ever never, ever* と強められていき, 主張内容とうまくかみ合っている。

- (42) Cruise : I do pictures for scale. I've *never* cared about money. You have to

understand. And I'm a wealthy person now. There's no question. You know. But, I *don't ever* pretend to really know what's gonna make money and making a decision based on that. That has *never, ever* been the reason why I've worked and my choices. ... - *English Journal*, July, 2004 (クルーズ：最低賃金で映画に出演することももちろんありますよ。お金のことを気にしたことはないんです。ご理解いただきたいと思います。それに今の僕は裕福な人間なんです。それは間違いありませんよ、もちろん。でも、どうすれば金儲けができるか考えようなんて夢にも思いませんし、それを基準に出演を決めることもありません。出演料が仕事をする理由、選択の理由になったことは一度たりともありませんよ。)

この他、次のような表現であえて否定語を繰り返すことを明言することによって、否定の内容を強調することもある。この repeat は、それ自体で否定語を繰り返すことを明示しているが、一呼吸おいて、後続する否定語の焦点化を図る働きがある。

- (43) 'No, *repeat*, no, I can't come to your concert. We've got to go to a parents' evening at school.' —Manser (1983) (だめです、繰り返して言いますが、だめです、あなたのコンサートにはいけません。学校の夜の保護者会に出席しなくてはならないんです。)
- (44) Gray said, "You did right in clearing out, but I think the person or persons who broke in left before you got home. And it wasn't *I repeat*, wasn't who you thought." A. McAllister, *No Need for Fear* (「君はうまく追い払ったよ。でも押し入った人物は、複数の人物だったかもしれないが、君が帰宅する前に出て行ったのだと思うよ。それにその人物は君が考えているような人物じゃないよ、繰り返すが、絶対にね。」)

否定表現を用いる場合に、何とか強調しようと工夫を凝らしている以上のような口語的累加否定表現を眺めていると、従来、非標準的であると非難されてきた次の例のような多重否定文(multiple negation)も、否定を強調するための自然な否定表現のバリエーションとして捉え直す必要があるように思われる。実際のコミュニケーションの場においては、文脈に支えられ、意味的に誤解を招くことはほとんどない。

- (45) "You didn't follow? "I *don't have no* gun." R.B. Parker, *Hugger Mugger* (「跡をつけなかったの?」「銃を持っていないからね。」)
- (46) "This ain't Africa," Flanagan said. "And there still *ain't no* sheets on the bed," Flaherty said. Ed McBain, *Nocturne* (「ここはアフリカじゃない。」と

フラナガンが言った。「それにしてもベッドにはシーツがまったくないのは事実だ。」とフラハーティーが応じた。)

多重否定は、歴史的に見ても否定を明示しようとする自然な心理が反映された文法的工夫で、古英語や初期の中英語ではごく普通に用いられており、助動詞として don't[doesn't]等が発達していく中で、言語の変遷の中では一旦は廃れてしまった用法であるが、現代英語の中で、否定を強める表現形式として、話し言葉を中心に、その独自の地位を確保しつつあると見ることもできる。形式的には古い統語形式を復活させていることになるが、言語変化(linguistic change)という視点ではなく、言語進化(linguistic evolution)の一現象として再認識する必要があるように思われる。

4. おわりに

英語コミュニケーションにおいて、まず必要な表現といえば、Yes と No ということになる。これは、コミュニケーションが対人間における相互作用であるということの現れであり、相手の意見に対して、同意あるいは不同意を表すことが、極めて基本的なこととして要求されるのである。しかし、不同意を言い表すのは、なかなか難しく、本稿で取り上げた表現のように、制限を加えて、控えめに打ち出すことがよくある。また、否定は、その否定自体が主張の対象となり、感情面も加わって、様々な形で強調され、強い自己主張として話し手の態度を表すこともある。

本稿では、否定表現から話し言葉の持つ多様性を眺めてきたが、ここで取り上げたすべての表現を英語教育に生かし、教えるべきであると主張しているわけではないが、本稿で示した様々な談話的志向性を吸収する形で、コミュニケーションの立場に立った文法記述の見直しが必要であろう。また、本稿で取り上げたような慣用表現についても、単に、話し言葉であるというラベルをつけることにとどまらず、実際のコミュニケーションにおいてそれぞれの表現がどのような語用論的意味を持つのか明らかにしていく必要がある。辞書記述においても、『ジーニアス英和辞典(第3版)』や『ウィズダム英和辞典』などに見られるように、各レキシカルフレイズの語用論的な機能を重視して、可能な限り盛り込んでいくことが必要であるように思われる。

本稿で示したように、話し言葉を単に例外ではなく、コミュニケーションの「規範」(norm)として捉え直し、談話文法的な視点を加味して再考することにより、'authentic'な英語の姿が浮き彫りとなり、真に使える英語、あるいは実際に使われている英語の文法記述が可能となるように思われる。話し言葉は、英語研究の課題の宝庫でもある。これまで培われてきた英語学の英知を結集し、生きた話し言葉の解明が期待される。そこに英語教育と英語学の新たな接点が見出せる。

注

1. 廣瀬(2004)で示した「学習文法」の重要性については、むしろ文法記述のレベルについて言うものであり、「学校文法」「学習文法」「科学文法」という並びで理解されるものである。「英語を使うための文法」、あるいは、「コミュニケーションのための文法」と言う場合には、むしろ文法の質的な面について言っており、英語教授法としてのコミュニカティブアプローチやナチュラルアプローチを支える機能主義に立脚した文法のことを言っている。
2. 用例中に現れた Yeah [= Yes]についても注意。No とは対照的に、自らの発話の妥当性を確認する機能を果たしており、これも談話調整機能を持つ言語表現であると位置づけることができる。会話における yes と no については、Crystal(1975)や Bald(1979)を参照。
3. こうした何らかの形で陳述に制限を加える否定表現は、but と共起する以下の例や、if not...の形で「たとえ...とまでは言わないにしても」の意で、not 以下により強意的なあるいはより包括的な語句を従え、それを否定する形で対応する主節の妥当性を巧みに述べる用法などにも見られ、否定表現の中に幅広く浸透している：I thought about it ,but not very long. - L. Block, *A Walk Among the Tombstones* (そのことについて考えたが、それほど時間をかけたわけではない。) / “His wife would be, if not cured, at least on the road to recovery.” - L. Hays, *Columbo#6* (「彼の奥さんは、たとえ完治していないにしても、少なくとも快方に向かっているよ。」)
4. I think [believe, etc.] not.の場合の情報構造と比較されたい。この場合には、not が主張の焦点となり、決定的ではないにせよ、自己主張としてそれに対する心的態度が述べられた表現と言える。ちなみに、この場合に、自己の思考や信念を客観化する表現形式となってしまう*Not I think[believe].とは言えない。
5. この”Not that...”が,”Not that I know of.”から発展していったという吉田(1987)の見解は支持できない。松田(1996)の指摘にあるように、歴史的な裏づけも見当たらない。ただし、現代英語の観点から、両者の表現が相補的に機能し、話し言葉の否定表現の中で、それぞれが意味的共通性を保ちながら、それぞれの持ち場で機能を果たしているという見方は可能である。
6. この’Not that...’構文は、but 以下との関連性を考慮に入れ、Baker(1975:37)の言う’addressee control’ という概念によっても、その意味機能がうまく説明できる：
The central concept within this framework is one of “addressee control”. We propose that verbal defensiveness can be viewed as use of components of the speech act to *control* the verbal behavior of an addressee by constraining the latter’s set of possible responses. Specifically, this control restricts negative responses such as criticism or objections to a speaker’s statements. また、Hewitt & Stokes(1975) では、’Disclaimers’(責任回避表現)と呼び、Edmondson(1981)では、’Disarmers’(緩衝表現)と称して、このような but に先行する発話の働きに言及している。

7. never を強める口語表現としては, never once / never in my all life / never for one moment / never in thousand years などもある。また, イギリス英語においては, never は独立的に用いられ, あり得ないと思っていたことが生じた場合に驚きを表す表現として用いられる[LDCE³] : Never! I don't believe it! (まさか。信じられないよ。) なお, 'Well, I never (did)!' は, 現在では, 主にイギリス英語の古風な表現となっている。さらに, 否定を強める次のような anything but の用法にも注意: I don't mean she's clever—anything but! - Manser(1983) (彼女が賢いなんていうつもりはない, とんでもない話だ。)
8. ever を添える形式以外にも, 次のように, 文尾に否定表現が繰り返される現象がよく見られる : His trim but not overtly muscular chest was red from a couple of body blows he'd taken early in the warm-up. They *didn't* hurt not yet. J. Rovin, *Broken Arrow* (彼の整った, しかしそれほど筋肉質でない胸は今朝のウォーミングアップで受けた2, 3発のパンチのために赤くなっていた。痛くはなかった, 今のところは。) 詳しくは, Biber et al. (1999:178)を参照。
9. 次のように, 不快な経験を将来二度と繰り返さないことを強調するために, never again を独立的に用いる場合もある : I went sailing once. *Never again!* - MED (一度航海に出たことがある。二度とそんなことしない。)

参考文献

- Baker, C. 1975. "This is just a first approximation, but... ." *CLS* 11, 37-47.
- Bald, W. 1979. "Some functions of yes and no in conversation." In S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik (eds.) *Studies in English Linguistics for Randolph Quirk* (Longman), 178-191.
- Biber, D. et al. 1999. *Longman Grammar of Spoken and Written English*. Longman.
- Crystal, D. 1975. *Advanced Conversational English*. Longman.
- De Devitiis, G. et al. 1989. *English Grammar for Communication*. Longman.
- Edmondson, W. 1982. *Spoken Discourse*. Longman.
- Hewitt, J.P. & R. Stokes. 1975. "Disclaimers," *American Sociological Review* 40, 1-11.
- Haiman, J. 1998. *Talk Is Cheap*. Oxford University Press.
- 廣瀬浩三. 1988. 「英語の談話修正表現について」六甲英語学研究会(編)『現代の言語研究』263-274. 金星堂.
- 廣瀬浩三. 1997. 「Love means never having to say "what do you mean?"—メタ言語活動の諸相(1)」『島大言語文化』第4号, 14-61.
- 廣瀬浩三. 1998. 「メタ言語的観点から見た英語表現について」小西友七先生傘寿記念論文集編集委員会(編)『現代英語の語法と文法』287-295. 大修館書店.
- 廣瀬浩三. 1999. 「Love means never having to say "what do you mean?"—メタ言語活動の諸相

(2) 『島大言語文化』 第7号, 1-51.

廣瀬浩三. 2005. 「学習英文法の再構築に向けて 「主語と動詞の一致」の問題を手がかりにして」 『島根大学外国語教育センタージャーナル』 創刊号, 35-51.

Krashen, S.D. & T.D. Terrell. 1983. *The Natural Approach : Language Acquisition in the Classroom*. Pergamon Press.

Littlewood, W. 1981. *Communicative Language Teaching : An Introduction*. Cambridge University Press.

Manser, 1983. *A Dictionary of Contemporary Idioms*. Pan Books.

松田 裕. 1996. 「Not that I know of . 考 語法とストレスとイントネーション」 『外国語外国語文化研究』 (関西学院大学法学部紀要), 77-98.

大田 朗. 1980. 『否定の意味』 大修館書店 .

Spears, R.A. 1992. *Common American Phrases in Everyday Contexts*. Macmillan Languagehouse.

Wilkins, D.A. *Notional Syllabuses : A Taxonomy and Its Relevance to Foreign Language Curriculum Development*. Oxford University Press.

吉田一彦. 1987. 『現代英語の表情』 研究社出版.

< 辞書 >

Cambridge international Dictionary of English. 1995. Cambridge. [CIDE]

Macmillan English Dictionary for Advanced Learners of American English. 2002. Macmillan. [MED]

Oxford Advanced Learner's Dictionary [6th Edition]. Oxford University Press. 2000. [OALD⁶]

Longman Active Study Dictionary [3rd Edition]. 1995. Longman. [LASD]

Longman Advanced American Dictionary. 2000. Longman. [LAAD]

Longman Dictioanry of Contemporary English [3rd Edition]. 1995. Longman. [LDCE³]